《開幕》マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート

2025年2月13日（木）ー6月8日（日）　森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

森美術館は、2025年2月13日（木）から6月8日（日）まで、「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート」展を開催します。

仮想空間と現実世界が接続し、人工知能（AI）が飛躍的に発展するなか、新しいテクノロジーは私たちの日常生活に急速に浸透し、とりわけコロナ禍は仮想空間における活動を加速させました。また、顧みればテクノロジーとアートは、コンピューター・アート、ビデオ・アートなどの歴史のなかで常に併走してきました。近年のビデオゲームやAIの発展がアーティストの創造活動に全く新しい可能性をもたらす一方で、生成AIの登場は、人類の創造力にとっての脅威ともなっています。こうした動向は、現代アートの文脈においても大きく注目されています。

本展では、ゲームエンジン[*1]、AI、仮想現実（VR）、さらには人間の創造性を超え得る生成AIなどのテクノロジーを採用した現代アート約50点を紹介します。そこではデジタル空間上のさまざまなデータが素材となった全く新しい美学やイメージメイキング（図像や画像を作ること）の手法、アバターやキャラクターなどジェンダーや人種という現実社会のアイデンティティからの解放、超現実的な風景の可視化、といった特性が見られます。ただ、これら新しい方法を採用しながら、アーティストの表現の根幹では普遍的な死生観や生命、倫理の問題、現代世界が抱える環境問題、歴史解釈、多様性といった課題が掘り下げられています。

「マシン」とアーティストが協働する作品や没入型の空間体験は、「ラブ（愛情）」、共感、高揚感、恐れ、不安など私たちの感情をおおいに揺さぶるでしょう。現実と仮想空間が入り混じる本展は、人類とテクノロジーの関係を考えるプラットフォームとして、不確実な未来をより良く生きる方法をともに想像する機会となるでしょう。

*1 コンピューター・ゲーム制作に必要な機能をまとめたソフトウェアをさす。

佐藤瞭太郎
《ダミー・ライフ #38》
2025年
インクジェットプリント
26.6×40.0 cm

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展アーティスト　＊姓のアルファベット順

ビープル	1981年 米国ウィスコンシン州ノースフォンデュラック生まれ、米国サウスカロライナ州チャールストン在住
ケイト・クロフォード、ヴラダン・ヨレル	1975年 シドニー生まれ、ニューヨーク在住 1977年 セルビア、ノビ・サド生まれ、同地およびベルリン在住
ディムート	1982年 ベルリン生まれ、ニューヨーク在住
藤倉麻子	1992年 埼玉生まれ、茨城在住
シュウ・ジャウェイ（許家維）	1983年 台湾、台中生まれ、台北在住
キム・アヨン	1979年 ソウル生まれ、同地在住
ルー・ヤン（陸揚）	上海生まれ、同地および東京在住
佐藤瞭太郎	1999年 北海道生まれ、神奈川在住
ジャコルビー・サッターホワイト	1986年 米国サウスカロライナ州コロンビア生まれ、ニューヨーク在住
ヤコブ・クスク・ステンセン	1987年 コペンハーゲン生まれ、同地在住
アドリアン・ビシャル・ロハス	1980年 アルゼンチン、ロサリオ生まれ、世界各地を拠点に活動
アニカ・イ	1971年 ソウル生まれ、ニューヨーク在住

開催概要

展覧会名：「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート」
主催：森美術館
助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【ライフウィズアート助成】（採択団体：森ビル株式会社）、文心藝術基金會、台湾文化部、台北駐日経済文化代表処台湾文化センター、洪建全基金會、デンマーク芸術財団
協賛：アンソロピック、楽天グループ株式会社、株式会社メルコグループ、株式会社大林組、Sakana AI
個人協賛：James Yi-Rong, Hsu
Katrina Lake
企画：片岡真実（森美術館館長）
マーティン・ゲルマン（森美術館アジャンクト・キュレーター）
矢作 学（森美術館アソシエイト・キュレーター）
アドバイザー：畠中 実（NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員）
谷口暁彦（メディア・アーティスト）
会期：2025年2月13日（木）－6月8日（日）
会場：森美術館（東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階）
開館時間：10:00-22:00（火曜日のみ17:00まで、ただし4月29日[火]、5月6日[火]は22:00まで）
＊ 入館は閉館時間の30分前まで　＊会期中無休

入館料：

	[平日]		[土・日・休日]	
	当日窓口	オンライン	当日窓口	オンライン
一般	2,000円	1,800円	2,200円	2,000円
学生（高校・大学生）	1,400円	1,300円	1,500円	1,400円
子供（中学生以下）	無 料			
シニア（65歳以上）	1,700円	1,500円	1,900円	1,700円

＊ 事前予約制（日時指定券）を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入が可能です。
＊ 当日、日時指定枠に空きがある場合は、事前予約なしでご入館いただけます。
＊ 表示料金は消費税込。
＊ 本展のチケットで、同時開催プログラム「MAMコレクション019：視点―春木麻衣子、片山真理、米田知子」「MAMスクリーン021：ガブリエル・アブランテス」「MAMリサーチ011：東京アンダーグラウンド 1960-1970年代 ― 戦後日本文化の転換期」もご鑑賞いただけます。

一般のお問い合わせ：Tel：050-5541-8600（ハローダイヤル）　森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

展覧会名の「マシン・ラブ」について

タイトルにある「マシン」は産業革命以降の重工業的な機械ではなく、コンピューターやハードウェアの総称としての「マシン」を意味します。20世紀初頭には機械のスピード感やダイナミズムが象徴する新たな時代を「マシン・エイジ」と呼び、多様な芸術分野で支持されましたが、本展では21世紀に発展したコンピューターやインターネットに深く関わる新しい「マシン」時代のアートに注目します。「ラブ」は、愛情、妬み、恐れ、高揚感など、ゲームやマシンに向けられる熱狂的な感情を連想させます。さらには、AIの発達した未来には、ロボットやアンドロイド、サイボーグなどが感情や意識を持つ主体となり得るのか、という哲学的な問いでもあります。

本展の特徴とみどころ

さまざまな領域の専門性が集結し、新しい世界を表現

現代アートに限らず、デザイン、ゲーム、AI研究などの領域で高く評価されるアーティスト、クリエイター12組が、生物学、地質学、哲学、音楽、ダンス、プログラミングなどの領域とのコラボレーションをとおして制作した作品を一堂に集めて紹介します。

デジタルとリアルが融合した世界を体験

アニカ・イの絵画や**アドリアン・ビシャル・ロハス**の彫刻など、見た目では非デジタルな作品の制作過程にもさまざまなテクノロジーが使われています。一方で、**ルー・ヤン**や**ヤコブ・クスク・ステンセン**は、デジタル映像作品と、そのなかに描かれた風景の一部やオブジェクトを現実空間にも出現させるインスタレーションを展開します。展覧会を鑑賞するなかで、デジタル空間とリアル空間が一つに連なるような感覚を体験できます。

アートやメディア・アートのプライズの受賞者多数

キム・アヨンは《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》(2022年)で、メディア・アート界の世界的な賞である、アルス・エレクトロニカ賞のニュー・アニメーション・アート部門で2023年にゴールデン・ニカ賞(グランプリ)を受賞、2024年には国立アジア文化殿堂(ACC)の第一回フューチャー・プライズを受賞しました。**ルー・ヤン**は2022年のドイツ銀行グループアーティスト・オブ・ザ・イヤーを、**シュウ・ジャウェイ**は2024年のアイ・アート＆フィルム・プライズ(アムステルダム、アイ・フィルム・ミュージアム)を、そして、**ケイト・クロフォード**と**ヴラダン・ヨレル**は《帝国の計算：テクノロジーと権力の系譜 1500年以降》(2023年)で、アルス・エレクトロニカ賞の中でもメディア・アートに革新をもたらしたアーティストを表彰するS+T+ARTSのグランプリを受賞しています。

インタラクティブな作品に観客が参加。インディー・ゲームセンターも

キム・アヨンの《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》のゲーム版や、AIキャラクターとの対話に挑戦できる[*2]**ディムート**の《エル・トゥルコ／リビングシアター》(2024年)などインタラクティブな作品に参加できます。また、インディー・ゲームセンター[*3]では、メディア・アーティストであり、本展アドバイザーである谷口暁彦が「私と他者」の二者の関係性をテーマにゲームをセレクトします。初心者でも楽しめるゲームを、来場者同士で実際にプレイすることができます。

*2 参加できるタイミングについては森美術館ウェブサイトをご確認ください。

*3 インディー・ゲーム(indie game)
個人または少人数の開発者が作った、メジャーなゲームにはない実験志向の強いゲーム。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219(日比)、070-4303-0744(松川)　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展の構成

デジタル世界のキャラクター、生命、人間や都市とのインタラクション

展覧会はデジタル空間、メタバースで生まれた最初の人間《ヒューマン・ワン》(2021年)で始まります。**ビープル**による初の立体作品である本作は、直方体の空間にいる人物が果てしなく世界を歩き続け、デジタル作品でありながら立体的な存在感を生んでいます。続く**佐藤瞭太郎**は、ゲーム制作に使われる兵士、少女、動物など無名のキャラクター・データ「アセット」を映像作品に大量に用い、どこか不穏で不条理な世界を描き出します。代替可能な生命として使われるアセットは、戦争や自然災害などで失われている現実世界の命を連想させ、その意味を改めて考えさせます。**ディムート**は、AI言語モデルに早くから関心を持ち、機械と人間の関係性を問い掛けてきました。出品作のひとつ《エル・トゥルコ／リビングシアター》のタイトルは、18世紀のハンガリーの発明家ヴォルフガング・フォン・ケンペレンによる自動チェスマシンが、実際には内部で人間が操作していたという逸話に由来したもので、2名のAIキャラクターあるいはAIと観客による哲学的な対話の場が設けられます。一方、**キム・アヨン**の映像作品《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》が描き出すのは、コロナ禍で拡がった配達サービスの移動の軌道です。それは最短距離、最短時間を競いながら、ソウルという都市空間をバイクで通りぬけるキャラクターのラブストーリーでもあります。

キム・アヨン　《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》
2022年　ビデオ　25分

テクノロジーと人間の精神性、仏教的な世界観

自身も仏教の実践者である**ルー・ヤン**は、新しいテクノロジーや大衆文化をとおして、人間の身体と意識に関する叡知を浮き彫りにします。自身のアバターDOKU(ドク)が登場する映像作品では、スピリチュアルな空間を旅しながら、身体と精神の関係性やアイデンティティなどを問います。**ジャコルビー・サッターホワイト**もまた、仏教における「慈悲の瞑想(メッター・プレイヤー)」を題材に、振付、壁紙、ビデオ、アニメーション、音楽が一体化したマルチ・メディア・インスタレーションで、万華鏡のようなCG世界を創出します。いずれもアーティスト自身のアバターが登場し、独自のサウンドやビジュアル・エフェクト、インスタレーションを通して、仏教的な世界観と新しいテクノロジーの壮大な融合を、観客は体験することになります。

ルー・ヤン(陸揚)《独生独死—自我》
2022年
ビデオ
36分
作曲、プロデュース：李鑫
サウンドエフェクト、マスタリング：杜佳宣
トランペット、フリューゲルホルン：豊玉程
ナレーション：タカノ・シンヤ

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219(日比)、070-4303-0744(松川)　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

テクノロジーが描く風景――地質学的時間から果てしない未来へ

シュウ・ジャウェイはテクノロジーの本質を金属や鉱物など地質学的な観点から捉え、無形のデータやクラウドではなく、物質としてのテクノロジーを起点に人類史をはるかに越えた時間軸へ想像を広げます。新作映像ではウェハーと呼ばれる半導体の材料に使われるシリコンに着目します。**藤倉麻子**は東京郊外の都市風景に関心を持ち、その均質性に西アジア文化圏の砂漠の風景を重ね合わせてきました。3DCGによる動画では、都市風景や工業製品などのテクスチャーやデジタル空間の光と影を探求しながら、独自のオアシスや庭園を創り上げます。**ヤコブ・クスク・ステンセン**は、フィールドワークや他者とのコラボレーションを通して生態系を探求します。映像と音響、光るガラス彫刻から成る没入型の映像インスタレーション《エフェメラル・レイク（一時湖）》（2024年）では、デス・バレーとモハーベ砂漠で採取した動植物、風景の写真や3Dスキャン、標本、録音データなどをデジタル化し、融合してシミュレーションによる仮想の湖とそれを取り巻く生態系を創り出しています。その光景は作家自身も予測不可能なほどに変化し続けます。生物学や生態系に深く関わる**アニカ・イ**の作品では、アーティストが長らくリサーチしてきたさまざまなイメージや過去の作品をマシンに学ばせ、新しく生成された世界が描かれます。さらに、**アドリアン・ビシャル・ロハス**は、コロナ禍下で開発したソフトウェア「タイムエンジン」で過去から果てしない未来までの時間軸から特定のタイミングを設定し、時空を越えた風景を描き出します。

ヤコブ・クスク・ステンセン
《エフェメラル・レイク（一時湖）》
2024年
ライブ・シミュレーション、生成される立体音響
コミッション：ハンブルク美術館（ドイツ）
展示風景：「エフェメラル・レイク（一時湖）」ハンブルク美術館、2024年
撮影：クリストフ・イルガング

テクノロジーと人間――500年間の関係

AI研究の第一人者である**ケイト・クロフォード**が情報通信技術（ICT）研究者でアーティストの**ヴダラン・ヨレル**と協働して描く《帝国の計算：テクノロジーと権力の系譜 1500年以降》は、16世紀以降のテクノロジーと権力の関係性を幅24メートルのインフォグラフィックにまとめたものです。テクノロジーと人間の関係を500年以上の長い時間軸で据えることで、戦争、AI、気候危機といった今日の世界的な変革を、グーテンベルグの活版印刷術が大きな文化的変化をもたらした時代、植民地主義が始まった大航海時代にまで立ち返って考えさせます。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展アーティストのプロフィール ＊姓のアルファベット順

ビープル

ビープル（本名：マイク・ウィンケルマン）はウェブで活動するデジタルアーティスト、グラフィックデザイナー、アニメーターであり、政治と社会を風刺する作品を制作している。2007年から毎日デジタル作品を制作し、オンライン投稿するプロジェクト「エブリデイズ」を開始。17年以上にわたり続けられている行為は、多くのデジタルアーティストに影響を与えている。NFT作品《エブリデイズ：最初の5000日》（2021年）がクリスティーズのオークションで記録的な高値で落札されたことで、現代アートで一躍注目を浴びるようになり、デジタルアートとNFTの存在を世界的に知らしめた。《ヒューマン・ワン》（2021年）は回転するビデオ彫刻であり、メタバースで生まれた最初の人間が、変わり続けるデジタル世界を旅する様子を表現している。この等身大の彫刻は、ビープルにとって物質性を伴う初めての作品であり、作品はイメージや形状を含め、アップデートされ続けている。

ビープル
《ヒューマン・ワン》
2021年-
4面スクリーン（16K）、磨かれたアルミメタル、マホガニー材の枠、メディアサーバー、NFTの変化と同期した映像（永続）
220×114.8×114.8 cm
展示風景：「ビープル：ヒューマン・ワン」M+（香港）、2022-2023年
撮影：ロク・チェン

ケイト・クロフォード、ヴラダン・ヨレル

ケイト・クロフォードは、AIとその影響に関する研究を国際的にリードする研究者。情報通信技術（ICT）の研究者でアーティスト、SHARE財団の共同設立者のヴラダン・ヨレルと協働し、リサーチとデザイン、科学とアートにまたがる調査を視覚化した《帝国の計算：テクノロジーと権力の系譜 1500年以降》（2023年）などを制作している。出展作でもある本作は16世紀以降のテクノロジーと権力がいかに絡み合ってきたかを描き出す、全長24メートルの「地図」である。現代においてテクノロジーを批評したり実装する際に、歴史的・政治的な文脈を長期的な視野で振り返ることなく、最新のスペクタクル体験やデバイスに目を奪われ、近視眼的になる状態を正す必要性を示しているようにも見える。

ケイト・クロフォード、ヴラダン・ヨレル
《帝国の計算：テクノロジーと権力の系譜 1500年以降》
2023年
展示風景：「帝国の計算：テクノロジーと権力の系譜 1500-2025年」プラダ財団オッセルヴァトリオ（イタリア、ミラノ）、2023-2024年
撮影：Piercarlo Quecchia — DSL Studio
画像提供：Fondazione Prada

ディムート

芸術と科学が重なりあう彼女の作品では、実験的なインスタレーションをとおしてさまざまな真理が掘り下げられる。進行中のプロジェクトでもAI、合成生物学、ヒトおよび植物の遺伝学、量子物理学、天体物理学などの科学者と協働している。本展には人間とマシンに関する彼女の研究が《総合的実体への3つのアプローチ》と題されて展示される。具体的にはAIと人間が対話する《エル・トゥルコ／リビングシアター》、対立する2つのAIマシン同士が議論する《エリスの林檎》、AIが人間の独り言を外在化させる《独り言》で構成され、最新のAIマシンに直面した人間の知能の意味を改めて問う。

ディムート
《総合的実体への3つのアプローチ》
2025年
AIインスタレーション
サイズ可変
テクニカル・コラボレーション：ジョージア工科大学、ノースイースタン大学、ユタ大学
制作協力：アンソロピック

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

藤倉麻子

仮構の都市の中で、巨大な工業品が生き物のように動き出す不思議な映像を3DCGで制作している。幼少期を過ごした都市郊外の高速道路やインフラが生み出す、均質化された光景への強い関心が反映された作品は、都市空間を規格化する、目に見えないルールを解き明かすものだ。建築と都市の開発がコンピューターのモデリングに大きく依存するいま、自らの感覚を通して仮想と現実の緊張関係を探求する実践は、現代の都市を巡る新たな風景論を提示できるかもしれない。2025年のベネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館展示に出品作家として参加予定。

藤倉麻子
《インパクト・トラッカー》
2025年
3チャンネル・ビデオ
13分38秒

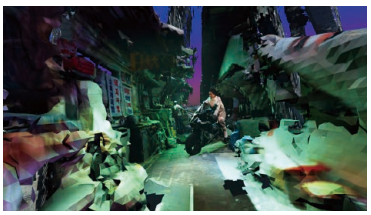
シュウ・ジャウェイ（許家維）

アーティスト、映像作家、キュレーターとして映画と現代アートの領域を往来する作品を制作しており、各地域の政治や産業の歴史を掘り下げるリサーチは、しばしば地質学的な時間スケールにまで及ぶ。本展では、現代のデジタル・テクノロジー製品に不可欠な半導体ウェハー用シリコンが砂浜から採取できることに着想を得て、バーチャルな海辺、水中でのチェロ演奏シーン、台湾でAI専用チップを研究する工業技術研究院の映像などを、生成AIによる音楽とともに構成し、最新テクノロジーを素材レベルから考察する。2024年にアイ・アート＆フィルム・プライズを受賞。

シュウ・ジャウェイ（許家維）
《シリコン・セレナーデ》
2024年
VR（仮想現実）、透明なコンピューターケース、ホストコンピューター、ブイ（浮標）、連結したスクリーン
5分

キム・アヨン

地政学、神話、テクノロジー、未来的な図像が融合した「スペキュラティブ・フィクション」と呼ばれる物語をもとに、ビデオ、VR、ゲーム・シミュレーションなどを制作している。出品作《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》（2022年）は、コロナ禍で注目された自宅等への配達サービスのため、他者と接触せず、都市における不可視の存在として最短距離、最短時間に挑む女性配達員が主人公である。配達経路を移動する迷宮、フラクタル構造のような軌跡は、異次元へと見る者を誘う。2023年にはアルス・ エレクトロニカ賞のニュー・アニメーション・アート部門でゴールデン・ニカ賞（グランプリ）を、2024年には国立アジア文化殿堂が創設したACCフューチャー・プライズを受賞。



キム・アヨン
《デリバリー・ダンサーズ・スフィア》
2022年
ビデオ
25分

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

ルー・ヤン（陸揚）

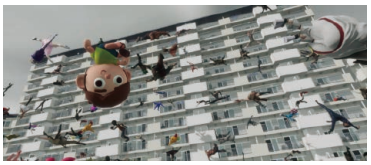
仏教的な叡智と超越論が、最新テクノロジーと大衆文化の要素を融合しながら表現される映像作品をとおして、人間の身体と意識について根源的な問いを投げかける。2022年からは、作家自身のデジタル・アバターが仏教世界のさまざまな次元を旅しながら「生と死」について問う映像シリーズ「DOKU（ドク）」（「人は一人で生まれ、一人で死ぬ」を意味する大乗仏教の言葉「独生独死」を着想源とする）を手掛けている。近年では、2024年にルイ・ヴィトン財団美術館（パリ）、2023年にバーゼル美術館（スイス）、2017年にはクリーブランド現代美術館（米国）などで個展を開催。2022年と2016年のベネチア・ビエンナーレをはじめ多数の国際展に参加。2019年にはBMWアート・ ジャーニー賞、2022年にはドイツ銀行グループアーティスト・オブ・ザ・イヤーを受賞。

ルー・ヤン（陸揚）
《独生独死ー自我》
2022年
ビデオ
36分
作曲、プロデュース：李鑫
サウンドエフェクト、マスタリング：杜佳宣
トランペット、フリューゲルホルン：豊玉程
ナレーション：タカノ・シンヤ

佐藤瞭太郎

大学院在学中、ビデオゲームに使われる3Dモデル、テクスチャ、アニメーションなどインターネット上に流通するデータ「アセット」を素材に、ゲームエンジンによる映像制作を始めた。ポストインターネット時代のサンプリングやMAD動画[*4]といったカルチャーの影響があるという。兵士、少女、動物などさまざまなキャラクターが繰り返し登場する不条理な物語は、安部公房などの短編小説やシュルレアリスムの絵画空間を連想させる一方で、現代社会を生きる人間の存在や生命の価値を問うものでもある。本展では記号として存在するアセットのキャラクターたちが、均一化された都市郊外の空間に放たれる新作映像を出品。

*4 MAD動画
アニメ作品やドラマ、映画、ゲームなどの著作物を、権利者以外の個人が編集した映像のこと。



佐藤瞭太郎
《アウトレット》
2025年
ビデオ
11分26秒

ジャコルビー・サッターホワイト

新しいテクノロジーを「クィア化」する（既成概念を問い直す）手段として、アナログで工業的なテクノロジーの理解にアフロ・フューチャリズムの思想、アフリカ系アメリカ人が抱く「解放された未来」というビジョン、そして大衆文化のイメージを融合させている。そうして、アイデンティティを演じ表現するための新たな規範を作ると同時に、政治的な力を伴う、これまでとは別の選択肢を提示する。こうした実践の背景には、独学のアーティストで統合失調症を患っていた母親パトリシア・サッターホワイトの影響もある。本展では仏教における慈悲の瞑想に着想を得て、2023年にメトロポリタン美術館から委嘱された新作《メッター・プレイヤー（慈悲の瞑想）》を発展させ、振付、壁紙、ビデオ、アニメーション、音楽が一体化したマルチメディア・インスタレーションで、万華鏡のようなCG世界を見せる。

ジャコルビー・サッターホワイト
《メッター・プレイヤー（慈悲の瞑想）》
2023年
4チャンネル・ビデオ・インスタレーション
21分28秒
Courtesy：Mitchell-Innes & Nash, New York

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

ヤコブ・クスク・ステンセン

3Dアニメーション、サウンド、ゲーム技術を駆使して、見過ごされがちな自然現象に、仮想シミュレーションによって生命を吹き込む没入型のインスタレーションを制作している。本展で紹介する《エフェメラル・レイク（一時湖）》（2024年）は、ドイツのロマン主義画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒに触発され、ハンブルク美術館から委嘱された作品で、映像と音響、光るガラス彫刻で構成される。乾燥した不毛の地に周期的に現れては消える自然現象「一時湖」に着想を得て、カリフォルニア州デス・バレーとモハーベ砂漠でのフィールドワークで作家自ら採取した動植物や風景の写真、3Dスキャン、標本や録音データを組み合わせて仮想の湖とその生態系を創り出している。その光景はリアルタイムに変化しながら、観る者の多様な感覚を呼び覚ます。

ヤコブ・クスク・ステンセン
《エフェメラル・レイク（一時湖）》　2024年
ライブ・シミュレーション、生成される立体音響
コミッション：ハンブルク美術館（ドイツ）
展示風景：「エフェメラル・レイク（一時湖）」ハンブルク美術館、2024年
撮影：アルタイ・タズ

アドリアン・ビシャル・ロハス

長期的な協働制作をとおして、荘厳でありながら脆さをはらむ、大規模でサイトスペシフィックなインスタレーションを制作している。彫刻、ドローイング、映像、文学、パフォーマンスを織り交ぜたその実践は、危機に瀕した人類、絶滅寸前の人類、あるいは、人類の絶滅後を探求するものであり、過去、現在、未来が折り重なりながら、多種多様な存在が絡み合う、人新世後の世界を映し出す。本展では、手続き型生成（アルゴリズムの処理による生成）とAIを基盤としたソフトウェア「タイムエンジン」を使用し、作家が「デジタル・エコロジー」と呼ぶ、デジタル上でシミュレーションされた環境をさまざまな条件下でモデリングする。作家自身がデザインした彫刻（または、あらゆる人工物）を観察することで、時間の経過が物質に与えうる影響をデジタルデータとして顕在化させる。

アドリアン・ビシャル・ロハス
《無題21（「想像力の終焉」シリーズより）》　2023年
活発なデジタル・エコロジーのライブ・シミュレーション、有機物、無機物、人工物、機械製の物質が組み合わさった層状複合体
Courtesy：kurimanzutto

アニカ・イ

生物学とテクノロジーの流動的な関係を探索することで、独自のアートを実践してきた。近年のアルゴリズムを用いたきらめく「絵画」シリーズは、彼女が長年の研究を通じて蓄積してきたイメージと、自身の初期作品のデータを融合させたものだ。これらのデータは、機械学習の生成ネットワークによって処理され、絵画の構図や物質感を形作っている。完成した絵画は反射したり透過したりする複数のレイヤーによって作られ、まるで動くレリーフのような感覚を生み出す。このシリーズは、作品がひとりの制作者によって作られる、あるいは制作した人間に帰属する創造物である、という絵画の伝統的な概念や人間の知性が及ぶ範囲にも問いを投げかけている。

アニカ・イ
《Öñ0K×ñ£0K×ñ》（「Kñ † M£M［量子泡］」シリーズより）　2024年
アクリル絵具、UV印刷、作家によるアルミ製フレーム
121.9×162.6×3.8 cm
Courtesy：Gladstone Gallery
撮影：デヴィッド・レーゲン
© Anicka Yi / ARS, New York / JASPAR, Tokyo, 2025　G3746

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。
https://tayori.com/f/machinelove/

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

展覧会関連プログラム

国際シンポジウム「ふたつの脳で生きる：AIとニュー・メディア・アートの女性たち」

※日英同時通訳、手話同時通訳付

本展の開催を記念して、1960年代以降のさまざまな地域や文化圏におけるニュー・メディア・アートの女性アーティストやノンバイナリー・アーティストたちにフォーカスを当てた国際シンポジウムを開催します。本シンポジウムでは、女性アーティストが新しいメディアを取り入れ、革新的なアートを制作することで、どのようにテクノロジーの発展に対応し新たな視点をもたらしたかについて、研究者、アーティスト、キュレーターなどの専門家が議論します。また、それらのテクノロジーが、ジェンダーや女性の身体、社会での役割の認識に対してどんな影響を与えてきたかを、アーティストの作品や思考をとおして検証します。

日時：［1日目］2025年2月15日（土）14:00-17:30（開場：13:30）
［2日目］2025年2月16日（日）14:00-17:30（開場：13:30）
会場：TOKYO NODE HALL（虎ノ門ヒルズ ステーションタワー46階）
定員：各日150名（要予約、先着順）
料金：各日500円（税込）　＊本チケットで展覧会はご覧いただけません。展覧会チケットは別途ご購入ください。
主催：森美術館、AWARE（Archives of Women Artists, Research and Exhibitions）
協力：TOKYO NODE
お申し込み：受付は終了しました

* AWARE（Archives of Women Artists, Research and Exhibitions）は、ジェンダーの問題や歴史における女性アーティストの認知をめぐる研究、交流、議論を促進することを目指し、2014年に設立された非営利団体です。

1日目　2025年2月15日（土）14:00-17:30（開場：13:30）

パネルディスカッション1
「1960-70年代ニュー・メディアの台頭と女性アーティストたち」

出演：ガブリエラ・アセヴェス・セパルヴェダ（サイモン・フレーザー大学インタラクティブ・アート＆テクノロジー学部准教授）
ダリア・ミル（カールスルーエ・アート・アンド・メディアセンター（ZKM）・キュレーター兼リサーチ・アソシエイト）
イ・スジョン（韓国国立近現代美術館キュレーター）
カミーユ・モリノー（AWAREディレクター兼共同創設者）
ニーナ・ヴォルツ（AWAREアーカイブ・インターナショナル・デベロップメント部門ヘッド）

パネルディスカッション2
「1990年代のデジタル領域におけるジェンダーとアートの再定義」

出演：カレン・チャン（サンフランシスコ近代美術館メディア部門キュレーター）
オウリマタ・グエ（美術評論家、キュレーター）
四方幸子（美術評論家、キュレーター）
片岡真実（森美術館館長）

2日目　2025年2月16日（日）14:00-17:30（開場：13:30）

「境界を超える表現としてのメディア・アート」

2日目のプログラムでは、1960年代以降の歴史的な考察を受け、アーティストたちがテクノロジーを使って行ってきた制作について、アーティストと森美術館キュレーターが3つのセッションで検証をします。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

セッション1
出演：スプツニ子！（アーティスト）
聞き手：片岡真実（森美術館館長）

セッション2
出演：ディムート（アーティスト）
聞き手：マーティン・ゲルマン（森美術館アジャンクト・キュレーター）

セッション3
出演：藤倉麻子（アーティスト）
聞き手：矢作 学（森美術館アソシエイト・キュレーター）

ラップアップ・ディスカッション
出演：カミーユ・モリノー（AWAREディレクター兼共同創設者）、片岡真実（森美術館館長）

アーティストトーク ※日英同時通訳・手話同時通訳付

出展アーティストが自作について語ります。

出演：ビープル、キム・アヨン、ヤコブ・クスク・ステンセン
日時：2025年2月13日（木）18:30-20:30（開場：18:15）
会場：森美術館オーディトリアム（六本木ヒルズ森タワー53階）
定員：70名（要予約、先着順）　**料金**：無料（ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です）
お申し込み：受付は終了しました

出演：シュウ・ジャウェイ（許家維）、ルー・ヤン（陸揚）
日時：2025年4月12日（土）14:00-15:30（開場：13:45）
会場：森美術館オーディトリアム（六本木ヒルズ森タワー53階）
定員：70名（要予約、先着順）　**料金**：無料（ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です）
お申し込み：森美術館ウェブサイト　www.mori.art.museum

キュレータートーク ※日英同時通訳・手話同時通訳付

展覧会企画のアドバイザーと担当キュレーターが本展の企画背景や展示作品について語ります。

出演：畠中 実（NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員）、谷口暁彦（メディア・アーティスト）、
片岡真実（森美術館館長）、マーティン・ゲルマン（森美術館アジャンクト・キュレーター）、
矢作 学（森美術館アソシエイト・キュレーター）
日時：2025年3月8日（土）18:30-20:30（開場：18:15）
会場：森美術館オーディトリアム（六本木ヒルズ森タワー53階）
定員：70名（要予約、先着順）　**料金**：無料（ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です）
お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

＊プログラムは予告なく変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。
＊このほかにも、おやこでアート、スクールプログラム、アクセスプログラムなどさまざまな企画を予定しています。
プログラムの詳細やお申し込みなどの最新情報は、森美術館ウェブサイトにてご確認ください。www.mori.art.museum

プログラムに関するお問い合わせ：森美術館 ラーニング担当
E-mail: mam-learning@mori.co.jp

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

関連情報

▌音声ガイド

本展出展作品の解説や見どころが収録された音声ガイドをウェブアプリにてご用意しています。専門用語も分かりやすく説明していますので、ぜひお楽しみください。日本語のナビゲーターは声優の水野まりえさんが務めます。
＊ご自身のスマートフォンをご持参ください。

ナビゲーター：水野まりえ　**ガイド件数**：全14件　**解説時間**：約25分　**言語**：日本語、英語　**料金**：500円（税込）
企画・制作：スタイリンクス　**監修**：森美術館

▌展覧会カタログ

森美術館 ショップ限定

出展アーティストへのインタビューをはじめ、片岡真実（森美術館館長）、マーティン・ゲルマン（森美術館アジャンクト・キュレーター）、矢作 学（森美術館アソシエイト・キュレーター）、畠中 実（NTTインターコミュニケーション・センター［ICC］主任学芸員）、谷口暁彦（メディア・アーティスト）による論考などを掲載。表紙カバーは２種類あり、そのうちの１つは森美術館 ショップ限定で販売します。

サイズ：A4判（29.7×21cm）　**ページ数**：240ページ（予定）　**言語**：日英バイリンガル
価格：3,850円（税込）　**発売日**：2025年4月上旬（予定）　**編著**：森美術館
発行：フィルムアート社
販売場所：森美術館 ショップ 53（六本木ヒルズ森タワー53階）、森美術館 ショップ（六本木ヒルズウェストウォーク３階）、森美術館オンラインショップ（https://shop.mori.art.museum/）

▌展覧会グッズ

森美術館オリジナル コットンバッグ（ナチュラル）×「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート」スペシャルエディション

森美術館のロゴがプリントされた定番のコットンバッグの裏面に、展覧会のタイトルがデザインされた、本展限定のスペシャルエディション。
価格：700円（税込）

DOKU The Flow パーカー

ルー・ヤン《独生独死—流動》の作中で登場するパーカー。主人公のDOKUが着用したものを再現し、作品全体に通ずるメッセージをプリントしています。先行販売です。
価格：15,400円（税込）

その他、展覧会ロゴがデザインされたアパレルやキーホルダー、出展作家のグッズなどが登場いたします。

お問い合わせ：森美術館 ショップ 53
Tel：03-6406-6118　営業時間：10:00-22:00（祝日を除く火曜日は17:00まで）　＊美術館の開館時間に準ずる

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

「リピーター割」で2回目半額!

映像作品を多く含む本展では、じっくりと展覧会をご堪能いただけるよう、「リピーター割」を実施します。オンラインでチケットを購入した方に、2回目の鑑賞料金が半額となる割引クーポンを発行します。ぜひご利用ください。

期間：2025年2月13日（木）－6月8日（日）「マシン・ラブ」展会期中
対象：専用オンラインサイトで「マシン・ラブ」展のチケットを購入し、使用した方
内容：オンラインチケットを使用した翌日に、会期中ご利用いただける半額割引クーポンを発行します。専用オンラインサイトにログインし、決裁画面で「クーポンの利用」から「お手持ちのクーポンを使う」を選択、クーポンの選択から「マシン・ラブ展リピーター割」を選択すると割引が適用されます。なお、クーポンの発行は1アカウントにつき1回のみとなります。また、割引の併用はできません。

オンライン限定! 3月まで「学割」で500円引き

新世代の作家が多く参加し、最新のテクノロジーを用いた現代アートを紹介する本展では、学生の皆さんを応援するオンライン限定の「学割」を実施。2月・3月に限り、専用オンラインサイトでチケットを購入時に、学生料金が500円引きとなるクーポンを発行します。

料金：オンラインチケット500円引き　※学生料金限定
クーポン配布期間：2025年1月20日（月）－3月31日（月）
クーポン割引対象：2025年2月13日（木）－3月31日（月）の日時指定券
対象：学生
※学生は高校、大学、大学院、短大、専門学校に通学する方
※来館時に身分証等をご提示ください
内容：森美術館ウェブサイトに記載のクーポンコードをご確認ください。専用オンラインサイトの決裁画面で「クーポンの利用」から「クーポンコードを入力して使う」を選択し、クーポンコードを入力すると割引が適用されます。なお、クーポンの使用は1アカウントにつき1回のみとなります。また、割引の併用はできません。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート」

同時開催小プログラムのご案内

会期：2025年2月13日（木）－6月8日（日）　**会場**：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）
＊「マシン・ラブ」展チケットでいずれのプログラムも鑑賞可

MAM COLLECTION

MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション019：視点―春木麻衣子、片山真理、米田知子

主催：森美術館
企画：マーティン・ゲルマン（森美術館アジャンクト・キュレーター）

印象派誕生から150周年の2024年、森美術館はレ・フランシスケーヌ（フランス、ノルマンディー、ドーヴィル）と「浮世：ジャポニスムから日本の現代アートまで」展を共催し、当館コレクションから17作家、34点を出品しました。本展はそのなかから春木麻衣子、片山真理、米田知子の3作家に焦点をあて、いわゆる記録媒体としての写真ではなく、鑑賞者が関与することでイメージが完成する写真作品を紹介します。

詳細：https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamcollection019/

片山真理
《beast》
2016年
ラムダプリント、オリジナルの額縁
120×120 cm
展示撮影：木奥恵三

MAM SCREEN

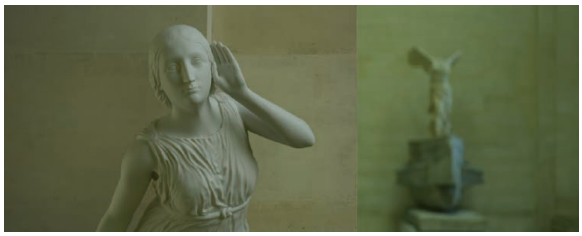
MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりのシングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン021：ガブリエル・アブランデス

主催：森美術館　**後援**：ポルトガル大使館文化部
企画：椿 玲子（森美術館キュレーター）

映画やビデオなど映像表現をとおして、ポストコロニアル、ジェンダー、アイデンティティなど、歴史的、政治的、社会的なテーマを探求するガブリエル・アブランデス（1984年、米国ノースカロライナ州生まれ、リスボン在住）。本展では映像作品《石娘の奇妙な冒険》（2019年）、《ホテルの一室で言い争う2体の彫刻》（2020年）、《人工的なユーモア》（2016年）、《鳥》（2012年）を展示します。

詳細：https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamscreen021/



ガブリエル・アブランデス　《石娘の数奇な冒険》　2019年
ビデオ、カラー、サウンド　19分53分

MAM RESEARCH

MAMリサーチは、アジアの現代美術を中心に特定の作家や動向に着目し、歴史的、社会的な文脈とともに考える資料展示です。

MAMリサーチ011：東京アンダーグラウンド 1960-1970年代―戦後日本文化の転換期

主催：森美術館
企画：大澤 啓（東京大学総合研究博物館 特任研究員）、椿 玲子（森美術館キュレーター）

1960年代後半から1970年にかけて、東京の都市空間を中心に日本の芸術界において一世を風靡した「アンダーグラウンド」、通称「アングラ」。本展では、東京におけるアンダーグラウンド文化の盛衰をテーマに、それを伝えるエフェメラ（一時的な使用を目的とした印刷物）を中心とした多くの資料を展示し、「アングラ」の歴史、その思想と担い手たち、そしてその広がりと限界を詳細に振り返ることを試みます。

詳細：https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamresearch011/

「草月シネマテーク：アンダーグラウンド・シネマ　日本・アメリカ」ポスター
1966年
画像提供：慶應義塾大学アート・センター

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

展覧会関連プログラム

MAMリサーチ011：東京アンダーグラウンド 1960-1970年代—戦後日本文化の転換期
トークセッション「アングラとは ── 麿 赤兒を迎えて」※日本語のみ、手話同時通訳付

アングラを出発点に60年以上にわたって身体表現を極め、アングラ文化を語るうえで欠かせない存在である舞踏家で俳優の麿赤兒氏（まろ・あかじ、1943年生まれ）をお迎えし、当時のアングラの動向と盛衰、その拠点であった新宿の様子、そして現在に受け継がれるアングラの精神について語っていただきます。

出演：麿 赤兒（大駱駝艦主宰・舞踏家・俳優）
聞き手：大澤 啓（東京大学総合研究博物館特任研究員）、椿 玲子（森美術館キュレーター）
日時：2025年4月1日（火）18:30-20:00（開場：18:00）
会場：森美術館オーディトリアム
定員：70名（要予約、先着順）
料金：無料
お申し込み：後日、森美術館ウェブサイトにてご案内します。　www.mori.art.museum

＊美術館は17:00で閉館し、18:00よりお申し込みいただいた方のみに「MAMリサーチ011」展を再オープンします。同時開催中の「マシン・ラブ：ビデオゲーム、AIと現代アート展」、「MAMスクリーン021：ガブリエル・アブランテス」、「MAMコレクション019：視点—春木麻衣子、片山真理、米田知子」はご覧いただけません。
＊プログラムは予告なく変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。
＊プログラムの詳細やお申し込みなどの最新情報は、森美術館ウェブサイトにてご確認ください。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、伊原、幡井
Tel: 070-4303-7219（日比）、070-4303-0744（松川）　E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp